しのびね物語の改作態度

大槻　修

序

いわゆる作り物語が近古小説に移りゆく過程を探る一つの材料として、ここに「しのびね」物語を取り上げ、いささか卑考を加えてみたい。

周知の通り、「月詣和歌集」「八雲御抄」「源氏一品経表白」などに見え、「風葉和歌集」に歌三首とられた古本「しのびね」は、いつの頃か失われ『改変』の手が加えられて、風貌の異なる現存本「しのびね」のみ残されるに至った。

ただ問題は、『改変』という言葉の解釈にあり、たとえば、それは単なる梗概化を指す場合もあれば、意図的改作を意味する場合もあって、ことは簡単に処理し得ない面があろう。

原作「夜の寝覚」に対する中村本「寝覚物語」。原作「いはでしのぶ」に対する三条西家本「いはでしのぶ」。また「狭衣物語」にみられる諸本の異文――加うるに最近紹介された同物語巻三の一部をとどめる伝後土御門院内侍筆切[1]の文章など、それぞれ『改変』のなされ方に違ったものがあり、ケース・バイ・ケースとして慎重な態度を要求される。

本稿では、まず古本「しのびね」から風葉和歌集にとられた三首の歌をめぐって、現存本との関係を考え、つづい

て現存諸本の本文異同という面から、その『改変』の態度を探ってみたい。

なお現存諸本の系統的分類については、桑原博史氏の、詳細を極めた御研究[2]を参照させていただいた。いま仮りに第一系統からは東京教育大学付属図書館蔵本（略称―教）、第二系統から宮内庁書陵部蔵本（略称―書）、第三系統から蓬左文庫蔵胡蝶装本（略称―蓬）の各本文を代表として、その異同を考えていくことにする。

一

まず風葉和歌集に所載の三首を記す。[3] ただ都合上、風葉集の排列順序と異なっている。

せちに思ひける女にこゝろにもあらすへたゝりにけれは世をそむかんとていさゝかたちよりて　しのひねの中将　（雑三、一三七一）

(A)行末を何契けんおもひいる山ちに雲のかゝりける世を
　ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける

(B)哀とも思ひおこせよしら雲のたなひく山に跡たえぬ共　（同、一三七二）

ないしのかみつれなきさまにみえ奉りけれは七日にの給はせける　しのひ音のみかとの御歌　（秋上、二二〇）

(C)けふさへやたゝにくらさんたなはたのあふよは雲のよそに聞つゝ

三谷栄一氏[4]は、風葉和歌集に所載された三首の歌が、現存本には見出せないけれども、それらの歌を挿むにふさわしい位置を文章の上で推定できるとされ、桂宮本叢書解題者[5]もほぼ同意見のようである。

さて三谷氏は、物語の梗概を、大体、日本文学大辞典に依られながら、中納言（男主人公）のもとを去った姫君（女主人公）のその後の様子を、

二人（私注―女主人公と尼君）は仕方なく由縁の典侍の所に身を寄せる。中納言は帰って来てこの事を知り、大に悲しんで只管籠ってゐる。一方典侍は心慰めにとも宮仕へを奨めるが、姫君はたゞ涙にくれてのみゐる。帝はこの由を聞かれ、典侍の局におはして、姫君を御覧になり慰め給ふも何の甲斐もない。帝は中納言のこの頃の物案じや噂などを聞かれ、この人こそ中納言の恋人ならんと察せられるが、御寵愛の心日に添うて深く、日々に局を訪はれる。中納言は或る日、ふと局を窺って帝のもとに、忍音の姫君が仕へてゐることを知り、今は定まる運命と諦めて出家の決心をする。その夜一度姫君に會ひ、来し方行末を語って別れるが、姫君は諸共にと慕はれるので、明日の暮に迎へに参らんと欺いて別れる。

と説かれ、(A)の歌は、そのあとの現存本の本文

いとまごひし給ふやうにて、御顔をつくゞと見給へば、いみじくなきはれて、きら〳〵としたる御顔のいよ〳〵光るやうにしろくうつくしければ、御髪をかきやりて、かく物思はせ奉るべき身となりけん宿世こそ心憂けれ。いかなりし昔の契りならむとて出で給へば、涙に暮れて、更にいづくへゆくともおぼえ給はず。

（本文は、第二系統、続群書類従本）

を引用されて、

「せちに思ひける女に心にもあらず隔りにければ、世をそむかんとていさゝかたちよりて」とある詞書より見れば、恐らく「いかなりし昔の契りならむとて出で給へば」といふその辺で詠んでゐたものではないかと思ふ。それが現存本には省かれてゐるのであって、筋書からいったなら、殆ど不自然を感ぜずに適合してゐるのである。

と考えられ、その論を受けて、桑原博史氏[6]も「一つの原作から、物語の筋はほとんどかえず、叙述を簡略化し歌を省略することによって別種の梗概本を作って行く」一つの例としておられる。しかし詳細に検討してみるに、中納言が、帝のもとに姫君が仕えていることを知り、ひそかに対面した最初は、ある年の十一月であった。

今夜はこきでんの参り給へるよしきこゆれば、よきひまと思ひて入奉る。たがひの御心中なか〳〵をしはかるべし。かつはうらみ、かつはなぐさめてもなみだつきせず。「をはせざりし日より、いかなる山のをくまでも引こもりたく侍しかども、いづくにいかにしてすみ給ふらんとだに、御行衛のきかまほしさに、いまゝで世にたち給ふ心の中は、いかばかりとかおぼしつる。されどもかくてさぶらひ給へば、さだめはいとめでたかるべきこと也。……此世のたいめむはこよひばかりこそかぎりならめ、よろづおぼしみだれで、さぶらひつき給へ。かくまでちかづき奉るも、いとびんなきことなれど、いまだ御心とけぬ事とみ奉りしかば、今一たびは何かくるしからましと思ひ侍てぞや。いかなる野のすへにても、御ことのわすれがたさに、ねんぶつもさわるべきと思ふこそ、かねてより心うけれ」といひつゞけてなき給へば、まして姫君の御心中いとゞかなし。

（教—52ウ〜53ウ。かりに句読点、濁点、「　」等を付す。以下同然。）

この文末、第三系統の蓬左文庫本は、

まして姫君はいひやらんかたもなくて、ふししづみなき給を、「こうまでな覚し入そ。かならず今一たびは参なん」とのたまいおきて出給いぬ。たがひの御こゝろのうちをしはかるべし。　（蓬—12ウ）

と異文があるように、年明けても中納言は姫君のことが忘れられず、いっそ出家を

二月に、とさだめ給ふに、日数のつもり行もさすがにかなしければ、「これも心からぞや、いかなる所へも引ぐして、いわをの中にも、もろ共にすごしなばや」とおぼしよるをり〳〵もあれど、　（教—57オ）

心はとざまこうざまに揺れ動き、承香殿の方の馬道にたたずんでは笛を吹きすさび、帝のおそばに仕える姫君を御簾の内に見ては、涙しながら立ち去る——日々がすぎる。重ねて一夜を共にしたのは、その二月であった。即ち姫君が諸共にと願うので、「今一度立ち帰り、明朝迎えにくるから」と欺いて、そのまま姿を隠す場面である。

こうした筋を考えるに、現存本では、姫君が内侍になっているのを知って、「かつ恨み、かつ慰めて」の、第一の逢う瀬と、出家に当ってもう一度姫君のもとを訪れ、つい虚言を吐いてしまった第二の逢う瀬（後文）と、都合二回も夜を共にしており、かつその間にも、御簾をへだてて—ではあるが、両者は対面もしている。

一方、風葉所載歌(A)の詞書をみるに、「こゝろにもあらすへたゝりにけれは」となっている。即ち、いざ出家しようと決心した男主人公が、女のもとに「いさゝかたちよる」まで、実は心ならずも久しく逢わず仕舞いになってしまっていたと考えられる。かかる点にいささか現存本の文章となじまないものがあり、三谷氏が指摘される当該個所

は、かりに、古本「しのびね」の場合、ふさわしい場面として、歌(A)が記されていたとしても、現存本の場合は、むしろ当該個所に「改作」の手が加えられており、その意味において、かならずしも「殆んど不自然を感ぜずに適合してゐる」とはいえないように思う。

加うるに、第二の逢う瀬の場面描写はかなりの長文にわたり、読者の興味と関心をそそる、いわば本編のヤマ場である。繁をいとわず、その全文を写す。

かの御つぼねへまぎれ入給ふ。よのつねの中だにもわかれはかなしかるべきを、中〳〵めもくれて（以下、「―見え奉らじ」マデ蓬左文庫本ニ長文ノ異文アリ）ものもおぼえず。「たゞさぶらひつき給へ。野山のすへにても、かやうにてさぶらひ給ときかば、いとうれしかるべし。いかなるかたへあくがれ出給とも、女は身を心にまかせぬものにて、思ひのほかなることも又あらば、いとほひなかるべし。御心となびき奉り給とをもはゞこそうらみもあらめ、今よりはあこが事をこそおぼさめ、をとなしくもならば、殿もわがかわりとおぼして、宮づかひにいだしたて給はんずらん、さやうの時は御らんじも又はみ奉ることもあるべし。我身こそたゞ今よりほかはゆめならずして見え奉らじ」とて、さめ〴〵となき給へば、ひめ君は、「たゞいづくまでも、もろ共にぐしてをはせよ。さらにのこりとゞまらじ。をくらかし給はんが心うき事」としたひ給へば、かくてはかなはじとおぼして、「さらばちからなし。ぐし奉るべし。此くれをまち給へ。まいりてあか月にもろ共に出侍らん。まづたゞ今はあまりにあはたゞしければ、今一ど、殿の御かほをも、あこをもみ侍らん」と、いとよくすかし給へば、あやうくて、「たゞ今まづいづくまでもぐしてをわせよ」とて、はぢのこともおぼえず、中納言にとりつきてはなれ給はねば、心ぐるしくかなしさせんかたなくて、「すかし奉ることはあるまじ。いづくまでも身にそふべき物なれば、是をとゞめ侍らん」とて、御じゆず、あふぎをおき給。いとゞあやしと思ひ給て、せんかたなくてなき給へば、なさけなくふりすてて、いかで

か出給べきなれば、とかくこしらへ給ほどに、夜もあけがたに成ぬ。「はしたなくならぬほどに出侍りて、くれは、とく御むかへにまいらむ。たとへぐし奉るとも、あかくなればいとみぐるしからん。又さりとて、此まゝあるべきならず、さやうにようしして待給へ」と、まことしくいひをしへて出給。めむだうまでひめ君をくり給に、心づよくはおぼせしはなるれど、これをかぎりとおぼせば、ありあけ月くまなきに、立とゞまり、「くれは、とく御むかゐにまいらむよ」とて、御かほをつく〴〵とみ給へば、いみじうなきはれたる御かほの、いよ〳〵ひかるやうにしろくうつくしければ、御ぐしをかきやりて、「かくものをもはせたてまつるべき身となりけむすくせこそ心うけれ。いかなるむかしのちぎりにて、身もいたづらに成ぬる」など、かきくどきつゝ出給ふ。涙にくれて、さらにいづくへ行ともおぼへ給はず。ひめ君は、此くれにわとおぼして、まち給ける御心の中ぞはかなかりける。

（教—59ウ～61ウ）

女の幸せを祈ってわが恋を捨てた男主人公が、いま別離の情もだしがたく、切々の別れを告げ、やがて意を決して立ち去るシーンは、絵巻にしたり、舞台にかければ、かならずや見る者の哀切の涙をさそい、よく似た構想を持つ「むぐら」「岩清水」「小夜衣」等にしても、当該個所は、物語の最高潮に至る一つの場面であって、「しのびね」作者が手腕をふるい、男女主人公の、委曲を尽くした心理描写がなされて当然の筈である。狭衣物語における飛鳥井姫君に関して、内閣・平出本の異文[8]があるように、蓬左文庫本に、第一・第二系統と異なった長文があることも、いかにこの場面が世にうけたかを示す一つの証拠といえるのではなかろうか。

しかるに、風葉所載歌(A)の詞書には、「いさゝかたちよりて」とのみあり、すでに小木喬氏[9]も説かれるように、風葉集の詞書では、女房を通じて歌をおくったというくらいのことで、親しく逢ったものとは思えない。

ほどの「すげなさ」である。推察するに、古本「しのびね」には、出家を決意した彼が姫君のもとへ「いさゝかたちよる」場面は描写されており、三谷氏の推測通り、歌(A)が記されていたとして、現存本のように、全三丁分に及ぶような両者対面の詳細な記述はなく、小木氏の考えを援用すれば、結局、男主人公は姫君と対面して、俗縁を断つべく精神的な最後のけじ目をつけ得ることなく、その意味で、本質的な心の整理のつかないまま世を背いたものの、風葉所載歌(B)の詞書等にみられるように、女君への未練を残してしまった（現存本では、男自づから以後の音信を断っている。この項後述）――という筋運びにでもなっていたのではなかろうか。加えて、そこにこそ現存本と古本とが、当該個所に限ってみても、内容的に著しく異なった作品になっていると考えられるフシがあり、三谷氏が

現存本は原作と筋書に於ては殆んど変りなく、全く符合するものであり、一歩も原作から脱線してゐないのであり、却ってその筋を主人公中心の筋書にと簡略化して行った傾向が見える。

とするよりも、むしろ古本「しのびね」を意図的に改作し、かなり物語の展開を増幅して、哀切極まりない男女主人公の心情をもり込んで新しく現存本「しのびね」が、装いを改めて登場したと考えることの方がむしろ自然のように思われるのである。

二

さて、翌暁、随身みつ家を供に、若君との最後の対面をすませた男君は、そのまま横川で出家する。京に残された男君の文は二通。一つは母北の方へ、一つは承香殿の中納言の局へ――即ち女君にあてたものであった。つづいて原文を引用する。

さて、姫君は、此くれとの給しをまち給へど、みえ給はず。たばかり給ひてやと心うくおぼしめす所に、此文をもちてまいりたるに、いそぎあけてみ給へば、さま〴〵のことゞもかき給て

「有明の月は雲井にすみはてゝよをこそ山のおくにいるとも
思ひいるみ山がくれのすまゐにもかたみにつなぐ人のをもかげ

うちすて奉ること、いかにうらめしくおぼすらん、されど、おもふ心あれば、ひたぶるにもおぼしそ。今はたゞ御かどの御心にたがわでさぶらひ給へ。いづくの野のすへまでも引ぐし奉りてこそあらまほしけれども、あこが事をおもふゆえぞとよ」

涙にくれて、えかきもつゞけ給はぬさまなり。　　（教—65ウ）

三谷氏は風葉所載歌(B)に触れて、

その詞書の「ほいとげてのち、おなじ人のもとにさしおかせける」から考へても、恐らく「哀とも思ひおこせよ」の歌が、右の二首の歌に竝んで書かれてあった連作ではなかったか。それが三首目あたりにあったが故に、省略させられてしまったのではなからうか

と推定され、住吉物語の例を参考にしておられる。確かに「思ひいるみ山がくれの—」の歌に見られる男君の心情、「いづくの野のすへまでも引ぐし奉りてこそあらまほしけれども」という文面に盛られた苦悩、加えて、「涙にくれて、えかきもつゞけ給はぬさま」だという手紙の状態など、風葉所載歌(B)を挿むに似つかわしい条件は整っているようにも思われる。半面、小木氏のように、

第三首（私注―歌(B)）は、出家してからひそかに使をやって、歌をさしおかせたというのだが、現存本の方は、全く音信を自ら断っている。風葉集の歌は、まだ未練が残っている趣ということが言えよう。

と考えることも可能かと思うのである。問題は左に掲げた歌(B)の詞書の受け取り方にかかわってくるのであろう。

ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける

男君が、みつ家を供に横川へ赴いたあと、不審に思った両親がふと見つけた二通の文。自分たちあての文面に驚くと同時に、両親たちは使をして、急ぎもう一通を、あて名通り姫君のもとに「持ってゆかせた」から、結果的には、「ほいとげてのち」に、彼女のもとに男君が歌を「さしおかせた」ことにもなり、三谷氏の考えられる条件にかなうであろう。

しかし、より直接的な動作主としての男君を意識した場合、出家したあとで、みずから、ひそかに使をやって、未練たっぷりな歌を姫君のもとに「さしおかせた」とも理解され、かかる場合は、小木氏の考え方が成り立つわけであり、ひいては、現存本の当該場面と歌(B)との適応度に、いささかの疑念が湧いてくるであろう。

さて私見を述べるならば、まず風葉所載歌(A)(B)が、巻十八、雑三の一三七一・一三七二と併記されていることに注意してみたい。歌(A)において、「しのひねの中将」は、詞書「いさゝかたちよりて」と、本人自身が、「せちに思ひける女」のもとへ立ち寄ったというまでもなく、なれば歌(B)の詞書もまた、素直に理解して、出家したあとで、男君が誰かを使として、姫君のもとへ歌(B)を「さしおかせた」（持って行かせた）と考えてよろしいのではなかろうか。より積極的な動作主として、男君の意志や行動をくみとり、歌(B)の詞書を読んだ場合、小木氏の考え方に首肯さ

せられる面が強いわけである。

当該場面、蓬左文庫本の異文によると、つぎのようになっている。

さて、ひめ君は、このくれとのたまへるを待給へどもみへたまはず。いつわり給てやとこゝろうくおぼさるゝに、此御ふみをもて参りたるに、いそぎあけて見給へば、さまゞ〳〵の事ども書給て、

「在明の月は雲井にすみはてよわれこそ山のおくに入とも

思ひ入見山がくれのすまいにもかたみにつるゝ人のおもかげ

うちすて奉る事、いかにうらめしくおぼすらん。おもふこゝろあれば、つらしともおぼしいりそ。今はたゞ御門の御心にたがはでさぶらひ給へ。かならず九ほんのうてなにてはおなじ蓮のさをも待奉らん。唯かりの世と覚しなせ」

など涙みだれに書みだし給へり。　（蓬—25オ）

第一系統の本文、教育大本と比較した場合に、特に男君の文の末尾が異なり、彼の出家する心の強固さと、姫君への説得力がうかがわれる。いまはわが子の将来を思って愛を捨てようと考え、しかし一方では、いづくの野末までも女君を引き具してゆきたいという恋情にもひきさかれて、思い悩む本心がありありとのぞいている前文に較べて、これは、男君の内心がいかであれ、文面上は涙ながらにも心強く持って、女君を悟す語勢に満ちていよう。

かかる場合、所載歌(B)は、男君の心情があまりに柔弱にすぎ、事ここに及んでなお未練たっぷりといった風情があって、当該場面に挿しはさむにしては、いささか不釣合なものを感じさせられる。

第一系統、第三系統いずれの本文が、より原初的なものか、本文の校合による「改変」の度合など、今後に残され

た問題は多いとしても、当面、風葉所載歌(B)を挿しはさむに適当な個所として、異文ある当該場面を考えることは、なおためらわれるものが残るのである。

拙稿の一に述べたように、古本「しのびね」における男主人公は、結局のところ姫君と対面の上、俗縁を断つべく、根本的な心の整理を済ませ得ぬまま、中途半端な状態で形式ばかり世を背いた——と描かれていたと仮定するならば、よりスムーズに歌(A)の詞書が理解され、より深く「行末を何契けん——」の歌そのもの悔恨の情もくみ取り得よう。

と同時に、なればこそ男君は、出家のあとも姫君を慕う心断ち切れず、その面影が身に添うて切なく、ひそかに使をやって、未練げな歌(B)をさし置かせたと考えられよう。

現存本によると、後文で、忘れ形見の子息、中将が、父中納言入道を訪ねて劇的な対面をするくだり、

あるあんしつにたづねより給へば、法花経をいとたかうどくじゆしてのち、ねんぶつ十ぺむばかり申声のしける、（教—73オ）

ちゝ君は、中将に聞え給。「此世のゑいぐわにほこりて、後の世のやみわすれ給ば、いとゆめのやうなる世中に侍るぞ」とて、御めをしのごひ給。（教—75ウ）

とあり、そこは俗念を断って修行に徹する聖としての姿勢がうかがわれ、歌(B)をめぐって想像される古本の描写からは随分異なったものを感じさせられる。つまりは現存本「しのびね」が古本と相当異なった作品であることを示す一材料ではなかろうか。

三

風葉所載歌(C)は七夕の日のことであるが、現存本に七夕の場面はない。もっとも、悲恋の姫君につのる帝の愛情を記したその後の状況を、現存本は

秋にも成ぬ。よもの山へのもみちして色〻にみゆるにも、「かく世をそむきはつべきはじめにこそ、ありしさがにてみそめしも、此世ばかりの契りならじ」とおぼし出るに、ただ今の心地して、恋しき事かぎりなし。御かどは、とかく心をとり給へ共、さらにひとことばも御返事もし給はず　(教—67ウ)

と描写しており、三谷氏のいわれる

「内侍のかみつれなき様に見え奉りければ七日宣はせける」といふ秋七夕に贈られた帝の御歌Ⅲ（私注—歌(C)）は、恐らくこの折あたりに見えたものではなかったか

とする推定も可能であろう。確かに帝と「しのびね」の姫君の贈答歌が一つ二つは記されて然るべき筈であるが、現存本にある総歌数十九首の内、帝から姫君への贈歌が一首もなく、古本には、当該場面か、否かはともかくとして、やはり何処かに七夕の件が記されていたであろうことは一応、推察されよう。故に、この項に関しては、三谷氏のいわれる通り、古本「しのびね」の当該場面に、本来七夕の記事があり、依然として心なびかない姫君を前に、「けふさへやたゞにくらさん——」と、そのつれなさを恨む帝の御歌があって、場合によっては、それに応える姫君の苦悩

の返しも歌われておったものの、男女主人公の悲恋に焦点をしぼり、そこに物語の増幅を図るあまり、現存本では省略し、抜萃してしまったのかも知れない。ひいてはその場面に限っては「原作を梗概的に抄録したものであったらしい」とする三谷氏の説を裏付けることにもなろうか。一方、小木氏もいわれる通り、現存本には七夕の日を叙した一節はない。考えるに、古本を全体的に書き改め、意図的に再編成する上で、当該場面に本来あったか否かはともかくとして、意識的に七夕の場面は叙述しなかったとも考えられよう。要は単に原作の梗概化という消極的な過程の内に七夕の項が除去されたものか、或いは、古本の意図的改変という、より積極的な過程を経て、七夕の項が改作者によって除去されたものか、その判断の如何によっては、一概に、筋書が原作と同一でありながら、詞章が梗概風に簡略化された一証左として、本項をとらえ得ぬ面があろうかと思うのである。ただ男君が、姫君の行方不明を知った折、姫君を恋い慕って、

すべて声もたてあへぬ心地して、むせかへり給ふこと、見るみもくるゝこゝちして、左中辨はかなしく見たてまつりて、「ありし嵯峨にやおはすらん。たづねまゐらん」とて、「ふみをたまひて」と申せば「あさましきことはなか〳〵夢かとのみたどられて」とさだかならずかきていだし給へり。まめやかにかみもいたく、身もあつきまでなきこがれたまへば、かたときもいのちさへあやうきを、などかく物おもひのたねとなりしことぞと、見そめけむなどありし秋の夕さへうらめしき心地す。　（読群書類従本）

と記す本文に則して、三谷氏は、

この本文の「見そめけむなどありし」とあるからには、八月の頃、姫君の山里の家を訪れて姫と始めて逢った折

に、この句を含む歌を詠んでゐたのであらうが、現存本には全く見えない。これなども恐らく現存本が抄録される折に略してしまったものではなかったかと思ふ。

と述べておられるが、例えば

- かたときもいのちさへあやうきを、などかく物おもひのたつね（マヽ）となりしことと、ありし秋の夕べさへうらめしきこゝちす。（書—35ウ）
- かた時の命さへあやうく覚え給。かんきうはんり月の前のはらわたとうちずんじ給て、などかく物思ひのたねと成し事ぞと、ありし秋の夕部さへうらめしきこゝちす。（蓬—38オ）

なる異文もあってみれば、必らずしも古本に、八月の頃、男君が姫君の山里の家で出逢った折「見そめけむ」なる句を含んだ歌が詠まれており、それが現存本の抄録される時に省略された——とする証拠と、厳密な意味ではなり得ないであろう。

掲げてみれば、現存本諸本の内にも異文なるもの多く、一例を示せば、帝の寵愛の内に、「しのびね」の姫君も次第に心なごみ、やがて若宮を出産するくだり、第一系統本は、

あくる春、若宮をさへうみ奉り給へば、いまだわう子もおわしまさぬ事をくちおしくおぼしめすに、いとうれしくおぼしめされて、御さひわひのめでたきことかぎりなし。やがてしよきやうてんの女御ときこゆ。（教—71ウ）

と簡単に記されており、第二系統の書陵部本もほぼ同文であるが、第三系統に属する蓬左文庫本は、非常な長文でその詳細を述べている。

かくて年も帰ぬ。二月ばかりよりれいならぬさまになやましくし給事も在けり。こちたくくるしかりなどはしたまはねども、つねより物まいる事いとゞなく、ふしてのみおわするを、うへわまたさやよ成人(マヽ)のありさまよくもみしりたまはねば、いかゞおぼつかながらせ給て、内侍に、などかくなやましげにみえ給らんとのたまはすれば、ありのまゝにさうし奉りて、御里なくてはいかゞ侍らんなど聞えければ、たぐいなくめづらしと覚して、うへの御はらからの式部卿の宮なん御里にさだめさせ給。かくて神無月晦日比よりなやましくし給て、まうで給ふうへは、夜の間の程も心もとながらせ給て、みずきやうなどさま〴〵にせさせ給。からうじて其あかつき、おとこ御子にて生給へれば、いまだ御子もおわせざらんをくちおしうおぼしつるに、まして男御子にさへをはすれば、いとめづらしうたぐいなき物に覚して、いそぎ参らせて御らんずるに、めづらか成ちごの御かたち成。うたがひなきまふけの君とおもほしかしづく事かぎりなし、かんの君はやがて中宮と聞えさせ給。　（蓬―32オ）

両者を比較するに、文章上の長短のほかに、出産の時期の違い、里下りの模様、出産までの帝の焦燥、「しのびね」の姫君の地位が、片や女御、片や中宮と、数えあげればかなり内容面に差異があろう。このような現存諸本のそれぞれが、共に「筋書の上で一歩も原作から脱線していないものであり、つまりは原作を梗概的に抄録し、短文化した結果の作品」とは到底考えられないと思うのである。

結語

以上のことから、現存本「しのびね」は、古本と相当異なった作品と考えられるが、加うるに、風葉所載歌(A)(C)にみられる最終官職名「中将」「ないしのかみ」「みかと」も、現存本では「入道中納言」「女院」「院」にまでひきつづき発展している。問題は、その継ぎ足し部分による改変の度合にかかわるものであろう。現存本三系統の諸本を校合するに、物語の発端部分はさしたる異動なく、例の女主人公が追い立てられて身を隠した後、男君が絶望するあたりから異文が目立ち、やがて女君が内侍となって「しのび音」に歎き、哀切の別離に涙したあと、男君が出離・遁世してゆく条は、はなはだしい異文を生じている。桂宮本叢書解題者は、

恐らく平安末期の忍音を或程度改作し、中将で出離遁世した悲恋の古物語の筋を、更に進めたものではなかろうかと考へられる。即ち現存の物語では、主人公は中納言に昇って出家してゐるし、「しのびねの君」は、承香殿女御となり女院になってハッピーエンドに終ってゐる

と述べているが、要はかかる現象を「或程度」の改作とみるか、主題にかかわる「相当程度」の改作と考えるかの違いであろう。原作「夜の寝覚」が、男女主人公をして、悲劇性の内にその終幕を予想させる筆致なるに較べて、室町初期に出来たと考えられる中村本（改作本）が、それをハッピーエンドに切り換えるという、それは作品の主題にまで影響する改変を行なっているのにも似て、現存本「しのびね」の終幕が、それは一概にハッピーエンドという言葉でいい切っては、語感の面でやや誤解を招く面なきにしもあらず、とはいうものの、一応の所、落ち着いた状態でしめくくられている点、古本からの増幅された部分の意義は大きいものがあると考えられよう。

さらに現存本の文末あたり、中納言の遺子が十二歳で中将となり、横川で今は聖と仰がれる父と対面の上、別れるシーン

中将はかへり給ふ。「かくみおきたてまつれば、いまはおり〳〵まいりてみたてまつらん。との・きたのかたきこしめしなば、いかにふしぎがらせ給ふべき」など申給ひていでやりたまはず。たちかへり〳〵見給へば、かうのけぶりにしづみ給へる御さまの、うら山しくもあはれにもおぼさるゝ。ちゝ君は、中将に聞え給ふ（傍点(教)ニテ補ナウ）。「この世のゑいぐわにほこりて、のちの世のやみわすれ給ふな。いとゆめのやうなるよの中に侍るぞ」とて、御めをしのごひ給ふ。（書—35ウ）

には、古本に描かれていなかった仏教説話的な要素も新しく加えられた改作態度が想像され、古本の成った時代社会と異なった思潮の流入も予測されるのである。

加えて、すでに桑原氏[10]も指摘される通り、現存本「しのびね」には、副詞「ちと」が頻出しており、

(イ) いまちとおもひしづめて（教・書・蓬）
(ロ) いまちとおもはせで（教・書・蓬）
(ハ) ここにちと人のしのびて（書）
(ニ) 心くるしげなるをちと物へまふづることの（書）
(ホ) ちと人にしのびて（蓬）
(ヘ) ちと物まふでする（書・蓬）

(ト) いまちともおとなしく　　（書・蓬）

の多くを数える。「ちと」は「あさぢが露」の文章にみられる[11]「むかへ」「をさおひ」「ひきし」などの語句や、「在明の別」[12]に出てくる「化け物」なる用例も併せ考え、いわゆる王朝物語系列とは異質の用語であり、平安末から鎌倉期に至る物語群の文章が、時代的、地域的、人為的その他の諸要素をまじえて、中世物語としての独得の、ある違った用語を含む文章を形づくってゆく過程を示しているといえよう。また現存本「しのびね」には、つぎのような一節がある。

「こはいかに、とふにつらさのまさるとかやことはりぞ」とて、そでを引のけ給へば、　　（教—49ウ）

修　大　概

例の「しのびねの内侍」のなびかぬ気色に、帝がいらだち、強引に彼女の泣き赤む顔を見られる場面であるが、思うに

建長三年九月十三夜十首の歌合に、山家秋風

吹く風もとふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里　　入道前右大臣　　（続古今集、巻十八、雑中）

を引歌とするものであろう。その詳細は旧稿[13]に譲るが、かかる引歌の用例は、他に「あさぢが露」「あまのかるも」「平家物語」「義経記」等に見え、いま仮りに、古本「しのびね」にも、かかる語句を含む一節があったとして、こ

の入道前右大臣、藤原定雅の歌をふまえて書かれたとみることが許されるならば、その成立時期は、定雅の歌の詠まれた建長三年（1251＝歌合の行なわれた時期）もしくは文永二年（1265＝続古今の成立時期）を溯ることは出来ず、もし文永二年（1265）を考えれば、まさに風葉和歌集撰進（文永八年、＝1271）の直前ということになり、その時点で、歌三首を所載された「しのびね」物語の価値もまた見逃がせないものがあろう。加うるに、月詣和歌集に見える「忍び音」物語は、歌集成立が寿永元年（1182）＝和歌文学大辞典＝であってみれば、さらに別種の古本「しのびね」ということになり、すでに幾種類かの古本の存在も推測されよう。ひいては、のちのち改作者の大いなる関心と興味をも引いたと思われる。

すでに本稿で詳述し、小木氏も検討を加えられた通り、古本「しのびね」は、風葉所載歌(A)(B)(C)から推察する所、いわゆる平安王朝物語的な男女主人公の優柔不断な内にも甘美な悲恋の物語――と考えられる。姫君は帝に寵愛される内侍となっても男君を忘れ切れず、恋い慕う「しのびね」の君であり、男君もまた、出家の後まで、今は内侍となって手の届かぬ彼女へ、未練たっぷりに逢う瀬を求める歌をこっそり送る――といった、いわば男女ともに確固たる個性を持たず、強烈な意志に乏しい、逆にそれだけセンチメンタルな哀愁・悲恋の物語たり得たのであろう。

それに較べて中納言入道が、一たび出家の決意をした上は、自づから女君との音信を断ち、仏道に精進して、遺児に無常を説く姿一つとってみても、物語の発端が

其頃、時のいうしよくと世にのゝしられ給ふは、内のおほいとのゝ四位の少将とかや、まことにひかりかゞやき給ふ御さまは、　（教―1オ）

と、著しく中世的書き出しになっているのと共に、それは、単に古本と筋書は同一であり、詞章を梗概風に簡略化されたものが現存本「しのびね」とは考えられず、黒川春村[14]がいう「文明頃の偽書」説は問題外としても、その詞章、構想、主題等の幅広い面にわたって、改作者による相当程度の意図的改作がなされたものと思われるのである。

注

(1) 藤井隆氏「源氏・狭衣物語古筆切について」（愛知大学国文学会編「久曽神昇博士還暦記念研究資料集」‖昭和四八年五月、風間書房）

(2) 桑原博史氏「中世物語の基礎的研究—資料と史的考察」（昭和四四年九月、風間書房）第七章、しのびね物語について。

(3) 中野・藤井両氏「増訂校本風葉和歌集」（昭和四五年一月、友山文庫）に依る。

(4) 三谷栄一氏「物語文学史論」（昭和二八年一一月、有精堂）第三版。三、古典の省略、三三六—三四三頁。以下、三谷氏の論引用は本書に依る。

(5) 伊地知・橋本両氏「桂宮本叢書、第十六巻、物語二」（昭和四〇年七月、養徳社）再版。解題六頁。

(6) 注（2）参照。

(7) 「のたまふ事もおぼえ給はず、やゝためらひて、いかにおぼすともかひあるべき事ならねば、御こゝろをもなぐさみ給へ。御こゝろとみえ奉り給ひなば、いかにうらみもふかく侍らん。たゞ身づからのすくせの程あさましう思ひ侍る。小君の事も御こゝろとめて覚したづね給へよ。おとなしく成侍らば、さだめてとのもみづからのかたみとおぼして、殿上せさせ給いなば、たがひにみも見へもしたまはん。身づからこそたゞいまより外は、ゆめならずしてはまたみ奉らん事もかたかるべし。ありし別よりも一しほこゝろうくこそおぼゆれ」（蓬—19オ・ウ）

(8) 注（4）二、読者と改作—説話上の改作、二八七頁。

(9) 小木喬氏「散逸物語の研究、平安・鎌倉時代編」（昭和四八年二月、笠間書院）四四四—四四七頁。以下、小木氏の論引用は本書に依る。

(10) 注（2）一八四頁。

(11) 拙稿「あさぢが露の文章」（平安文学研究、第四七輯、昭和四六年一一月）

(12) 拙著「在明の別の研究」（昭和四四年一〇月、桜楓社）四七五頁。

(13) 拙稿「あさぢが露と浅茅原の尚侍」（ビブリア、第五一号、昭和四七年六月）

(14) 黒川春村「古物語類字鈔」（明治三二年七月、東京築地活版製造所）墨水遺稿、六〇頁。

（昭和四八年一〇月三〇日）